

(公社) 日本給食サービス協会会長賞

『当たり前という幸せ』

広島県呉市立白岳小学校 四年 男子 武知 蒼真

ぼくの思い出に残る給食は、「かんパン」と「すいとん」です。

ぼくが住んでいるのは、広島県にある呉市の広という町です。広島には昭和二十年八月六日に原爆くが投下されましたが、その少し前の七月一日に、呉の町も大きな空しゅうを受けました。その時、たくさんのひがいが出て、多くの方が亡くなられたそうです。その呉空しゅうで亡くなられた方のごめい福をお祈りし、平和について考えるために、この給食が出たそうです。

「すいとん」は、せんそう中、食料が少ない中で、少しでもおなかをみたすために、小麦粉のだんごをおしるに入れて、量をふやす工夫をしていたそうです。「かんパン」は、せんそう中に兵たいさんの持ち歩く食料となっていたそうです。

呉市は今年の七月六日、大雨がふり、あちこちで土しや崩れや、だん水がおき、多くの方が亡くなられました。ぼくの家は、ひがいはなかったけど、だん水になりました。

だん水になると、飲み水に困るし料理も作れなくなるので、お母さんは、急いでスーパーに買い物をしに行きました。お店では、みんな、きそい合うように、水やお茶、そして水を使わずに食べられるパンやおにぎり、レトルト食品などを買っていたそうです。お店の中は半分パニック状態だったそうです。

だん水は一週間あまり続きました。その間、トイレはバケツの水で流し、何日もお風呂に入れませんでした。お水をもらうために、何時間もならんで待たなければいけませんでした。

食事は、かん単に食べられるパンやレトルト食品でした。最初は、すきなパンやカレーなどが食べられてうれしかったけど、だんだんとあきてきました。そして、いつも食べていた、温かいごはんやお肉、お魚や野菜いが食べたくなりました。そんな時、あの「すいとん」と「かんパン」の給食を思い出しました。せんそう中はパンやレトルト食品などはなかったの、今よりもっと不べんで大変だったんだらうな、食べ物が少ないおなかが空いていたんだらうな、と思いました。

だん水中は、学校も休みだったので、もちろん給食も食べられませんでした。そんな生活の中で、水が出る事、電気がつく事、食べ物にこまらない事、全部当たり前だと思っていたことが、そうではないと思えました。そして何より、今生きていることも、当たり前前ではなくて、幸せだとすごく思いました。

二学期からまた、いつも通り学校が始まり、給食も食べられます。ひさい地の学校でも、早く生活が元通りになって、美味しい給食が食べられるといいなと思います。

これからは、食べられること、そして、生きていることに感しやを忘れず、毎日を大切にすごしていこうと思います。